紅花入門

紅花は咲いている

早田茂松

紅花入門

紅花は咲いている

早田茂松

紅花入門

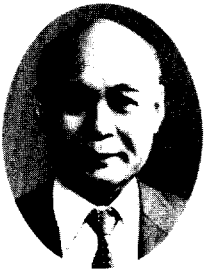
紅花は咲いている

早田茂松

目次

すいせんのことば……桑島　茂……2
はじめに……4
紅花と取組んで……新田秀次……6
発刊にあたり……菅原　結……8
■**第一部／紅花のおいたち**……15
紅花に捧げる……15
紅花の生いたち……16
日本における紅花の流れ……36
最上紅花……72
米沢織と紅花……101
最上紅花の復活……116
紅花染めの復活に貢献された人々……121
■**第二部／紅花の栽培と染色法**……161
紅花の栽培……163
紅花餅の製法……170
紅花の色素抽出と染色法……176
紅花染における注意……190
昔の紅花染……192
■**第三部／紅花余談**……199
寒紅……200

紅下し……207
紅花染と水……212
古代の貢納制と紅花……217
延喜式における紅花染……226
紅花栽培の起原および品種……231
万葉集と紅花……235
紅花信仰……248
末摘花……255
出雲地方の紅染湯あげ……259
紅花木綿……260
染紙と紅花……263
紅花大尽……269
最上千駄……276
目早、サンベと紅花……287
越後ちぢみと紅花……293
紅花と宮崎友禅斉……297
紅花と紅花産地の変遷……302
紅花と種子……312
横山華山と紅花屏風……318
中国古墳と紅花染……326
参考文献……329
あとがき



すいせんのことば

米沢織物工業協同組合
理事長　桑島　茂

紅花が日本に伝来して、千数百年、一時は日本の歴史のなかから、忽然と姿を消し、「幻の花」「幻の色」となったが、出羽路（山形県）の人々のたゆまない努力と、熱意によって再現されました。

紅花は、日本人の色として、万葉の人々に、こよなく愛され、万葉のロマンを、永遠に伝える讃歌として、いまもなお人々の胸をうち、さらに江戸時代には友禅染として、華麗にして、情感あふれる色のなかに、「うつろふ色」といわれた、紅のかれんさと、儚さを、にじませ、上流階級から庶民にいたるまで、魅了して止まなかったといわれております。短い花の命を、紅の姿に生れ変って、人の世を彩った、紅花の秘められた生命力の偉大さに、うちのめされる想いであります。

本書により、紅花の歴史と、紅花のロマンを、あらためて知ることがで来ました。

また、この日本に絶えてしまった、紅花の栽培、紅花染の再現に努力された方々に心から敬意を表するものであります。

この本を多くの人々に読んでいただき、紅花が今後も日本から絶ゆることのないようご協力と、米沢織のなかに、伝統的工芸品として再現された、紅花染の織物を、一度手にとっていただくことを御願いし、すいせんのことばといたします。

はじめに

紅花がわが国に伝来されて以来千数百年、かれんな花にロマンを秘め、織物文化の発展に大きな貢献をいたしました。紅花は重要な染ぐさとして国内の各地に栽培されましたが、そのなかで「最上紅花」は江戸時代出羽の国（山形県）の代表的な産物として、わが国で栽培された紅花の過半数を生産し繁栄をきわめました。しかし、それは紅花原料を生産するだけで、主役はあくまでも京都でした。京染、京紅ななど、あでやかなロマンの色として、華やかな平安、桃山、元禄文化に重大な役割を果たしたのでした。

ところがこの最も美しい、華やかな色として一世を風びした紅花も、明治維新と共に輸入された化学染料のために、衰退の一途をたどり、紅花栽培も昭和十六年の第二次大戦のぼっ発という世界情勢のため、まったく絶え「幻の花」となってしまいました。

この長い暗く、きびしい戦争も昭和二十年八月十五日終戦を迎え、再び平和が訪ずれると、山形県

伝統の花「紅花」を咲かせようとするごくわずかな、かつての紅花農家の人たちによって見事復活され、また紅花染も山形県米沢市の鈴木孝男氏の情熱により復元されました。そして米沢織に導入された紅花染は猪俣市弥氏、新田秀次氏などの努力によって、紅花紬として開花しました。

京都で絶えた紅花染を原料生産地で復活した意義は、きわめて大きくその功績は後世に残る大きなものと思います。しかし、現在紅花についての知識も関心もその関係者以外はきわめて低いといわれています。この紅花をもっと多くの人々に知ってもらい、この山形を代表する県花を「幻の花」にしないことが、幾多の困難と労苦に耐え紅花を復活された人たちに対する、私の願いであり、多くの人たちが紅花をはぐくみ育て、日本人のロマンの花とすることを心から念じます。

昭和五十九年　七月

早田茂松

紅花と取組んで

紅花染織　新田秀次

紅花と取組んでから二十二年程になります。海外に出たのも十五・六年前カンボチヤ国のアンコールワット、トム、タケオ、そのワットの外廊石材に赤色の塗料の痕跡が有るという事を聞いたのでタイ国よりシンガポール、カンボチヤに入国拝見した事がありました。通訳を通し色々聞きましたら、日本のベンガラであった。又数年後インドネシヤ、バリー島、主に絣バデックを、又ネパール、インド等歩きましたが紅染は見あたりませんでした。

現在、紅花を栽培している国はトルコ、アフガニスタン、インド、この三ヶ国は花より黄色色素を出し食品の色付けに使用、私も印度にてカレー料理の一種に入っておりました毎日紅染をやっているの

ですぐわかりました。又昔は紅花の黄色を除いて紅を発色させ、ヒンズー教の主に女性の額に付ける風俗が有りましたが、現在は顔料を使用しております。

その他中国、日本、米国カリフォリニヤ等の古い文化を有する国の紅花染織を拝見したく足を運んでおりますが、なかなか有りません。

早田先生は工業学校で一年先輩、学生時代色々とお世話になった仲です。この度、米沢の紅花に関する事を書かれた数少ない本と思います。

発刊にあたり

民芸草木染菅原工房
漢方染　蚕桑苑（こくわえん）

菅原　結

歴史香る「みちのく」の織物のまち米沢に、伝統的な草木による染色が、行なわれるようになり、人々に手づくりの尊さ、草木のぬくもりと、自然の美さを、教えたのは紅花でありましょう。化学染料では到底表現し得ない、匂うような、初々しい美しさは、紅花のみの持つ魅力でありましょう。

この紅花がいかなるけい過をへて、炎熱の地エジプトから、わが国に伝わり、万葉の人々の「思い色」として愛好され、日本人の着物の色として、千数百年の長きにわたり、君臨したのであろうか。非常に興味の覚えるところであります。しかし、一方物質文明に虫ばまれた現代社会においては、古いものの良さが、年ごとに失われつつあります。

このような環境に生活している私どもは、「古いものを追求し、そこから学び、探し出し、生活の糧とすること」、これが一番尊いことであると思います。

この著書は、紅花の歴史の追求であり、日本人の歴史の追求でもありましょう。多くの人々に紅花を知っていただき、紅花が永遠に咲き続けることを念じ、より多くの方々にこの本をお読みいただくようおすすめいたします。

紬花染

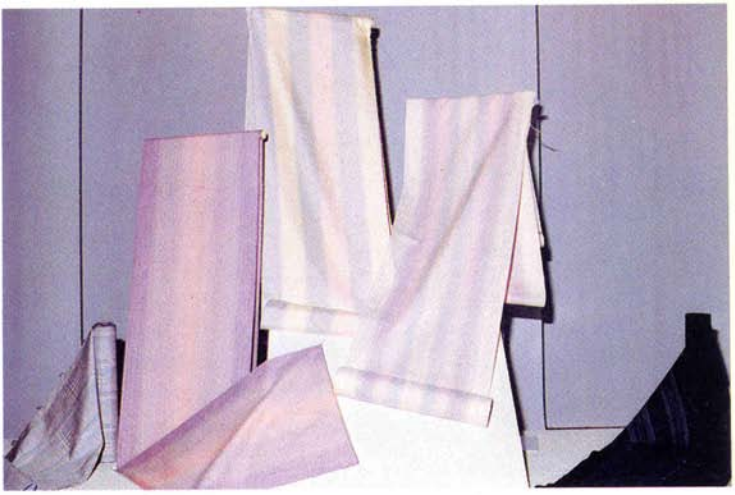
繭を紡ぐ
ひと糸、ひと糸を大切に染め
心をこめて織りなす
伝承された技法を頑なに
守り続け、より芸術性の高い
そして心にやすらぎを与える
作品を創造したい

紅染友禅

もえたつような
紅の衣裳は
華麗にして
吉祥を表現し
人々を魅了して
止まなかった

紅花友禅

米沢織に復元された紅花紬



紅花染

新田秀次氏提供